

御卒業おめでとう

平成 29 年度 第 69 回

卒業証書授与式

式 次 第

1. 開 式 の こ と ば
2. 国 歌
3. 校 歌
4. 卒 業 証 書 授 与
5. 表 彰 状 授 与
 - 1) 日本私立中学高等学校連合会賞
 - 2) 桃 李 賞
 - 3) 皆 勤 賞
 - 4) クラブ功労賞
6. 学 校 長 式 辞
7. 理 事 長 祝 辞
8. 祝 辞
 - 1) 福 島 県 知 事
 - 2) 福 島 市 長
 - 3) 桃李の会会長
9. 在 校 生 代 表 送 辞
10. 卒 業 生 代 表 答 辞
11. 式歌 仰げば尊し、蛍の光
12. 閉 式 の こ と ば

福島成蹊高等学校



式 辞

三寒四温と申しますが、寒さの中にも春の訪れが感じられる本日、平成 29 年度第 69 回卒業式を挙げるにあたり、ご来賓、保護者の皆様のご臨席を賜り厚く御礼申し上げます。

ただ今ここに於いて、高等学校普通教育課程を修了しました卒業生諸君 312 名に、卒業証書を授与しました。卒業生諸君、卒業おめでとう。また、今日までご子息ご息女を育てられた保護者の皆様のご労苦に対し、こころからお祝いを申し上げます。おめでとうございます。加えて、これまでの本校に対する、ご理解と物心両面に渡るご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

卒業生諸君は、中学校入学直前に前代未聞の大震災を経験しました。自然災害と、直後の人災がもたらした混乱の中で、中学校生活を始めたのです。中学・高校と 6 年間をここ福島で学び、他では出来ない貴重な経験をしてきました。諸君にはその証として様々な困難を乗り越えて来た力強さが備わって居る筈です。その事を実感できた機会の一つに海外研修があったのではないのでしょうか。普通コースは台湾に、特進コースは多民族国家であるカナダへ、一貫コースはベトナムとカンボジアで研修を行いました。これらの国は、新興国・先進国・途上国にカテゴライズされ、置かれている状況が異なります。しかし、同世代交流を通じ懸命に生きる姿から多くを学び、考え、日本に居ては気づく事のない衝撃にも出会った筈です。どうか様々な問題を抱えているのは自分達だけではないと言う事と、相手の立場に立って考える事の大切さを忘れないで下さい。

3 年生諸君は、地域に於いても伝統を受け継ぎ、良き市民の一員として生活してくれたと思います。取り分け挨拶の良さ、品格の高い制服の着こなし、公共の場では手を差し伸べる等『校訓』の理念を態度で示してくれました。また、常日頃に於ける正攻法での取り組みは、学習・クラブ、生徒会、ボランティア活動等でも、多くの成果を挙げました。ある意味、勤勉が代名詞の一つになったとも思います。中でも、陸上競技クラブ・ギタークラブの全国大会での活躍は素晴らしいものが在り、個人でも全国女子将棋女子選抜大会での準優勝や、水泳クラブや自然科学部の活動も鮮明に残っています。現在、努力が実を結び、進路が決まっている人も居りますが、受験真っ直中の人も少なくはありません。どうか、残さ





れた期間を、全力で頑張しましょう。私は、諸君が必ず志望校に合格すると信じています。

ここで、餞として本校の校訓「桃李不言下自成蹊」に触れます。校訓は、前漢時代の武将“李廣”の生き様と、不可分のものです。“李廣”は、文帝・景帝・武帝の3代の皇帝に使えた、虎をも射抜く弓の名手でした。敵からは恐れられましたが、反面、敬われた武人でも在ります。匈奴の宿敵“単于”と勇猛果敢に戦い続け、生涯にわたりかけがえのない邦を守った人なのです。没後、彼を惜しみ、司馬遷が『史記』の中で称えたのです。ご存知の様に“李廣”が使えた武帝は、西域に勢力の拡大を図った皇帝です。その結果、国際化が進み、人・情報・物流が激しく行き交う時代をつくりました。この事は現在にも通じ、また、同様なのです。この様な時代が求めるのは、常に厳しく責任を全うする人としての実力です。しかし、だからと言って、怯んでは成りません。そこは諸君の活躍のステージであり、夢を叶えるチャンスの中にも在ります。明日からは、進路の別無く、家庭・学校の庇護下にあった甘さは許されません。諸君を待ちかまえる困難に立ち向かい、挑み、乗り越える勇気が求められます。その時、必ず成蹊で学んだ“桃李のスピリット”が支えてくれます。曰く“自分に厳しく・他を思いやり・真摯に努力する”のです。どうか、“李廣”同様、かけがえのないものを守れる人になって下さい。諸君の夢を叶えて下さい。

結びに、諸君の母校が、次の世紀も繁栄し、名実共に誇れる学校となすべく、これからも尽力することを誓い私の式辞とします。

平成 30 年 3 月 1 日

福島成蹊中学校・高等学校

校長 本 田 哲 朗





祝 辞

長く厳しかった冬の寒さを幾分残しながらも、着実に春の息吹が感じられる今日の良き日、312名の福島成蹊高等学校の卒業生諸君には、晴れてのご卒業誠にめでとうございます。

また、今日まで長きにわたり支えて来られた保護者の皆様には、ここまで成長したお子様方を目の前にし、感無量のこととお慶び申し上げます。さらに、公私多忙な中、多くのご来賓の皆様にご臨席賜りましたことに、心から深く感謝を申し上げます。

さて、学校法人福島成蹊学園は、大正2年（1913年）の創立以後、104年の歴史を重ねておりますが、校訓「桃李不言下自成蹊」の教えは変わることなく、これまでに卒業生2万7千余名を社会に輩出してまいりました。

開学当時、福島県内には53の私学があったと聞いておりますが、当時あった私学のうち、今に至り現存する私学2校のうちの1校がここに臨んでいる卒業生諸君の母校であります。

平成25年度は学校法人福島成蹊学園創立百周年の記念すべき年となりました。今年度卒業生のうち、福島成蹊中学校から入学の諸君は、当時、中学2年生として各種記念事業に関わり、キャッチフレーズ「世代をつなぐ桃李の絆」を実際の行動をもって示してくれました。この機会をお借りし、理事会の立場から敬意と感謝を申し上げます。

先ほど、校長先生から卒業証書の授与がありました。これは、高校生活3年間の中で、それぞれが積み重ねた努力の結果であり、大きな栄誉であります。どうぞこのことは、自信と誇りとしていただくとともに、各人が描く次なるステージにおいても果敢にチャレンジを重ねられるものと信じています。

私どもは、本年度より不易たる校訓の下、教育理念に「心を育み、叡知を究める。」、そしてその時代に相応しく、かつ、その時代に求められる教育を追求すべく、「感性と品性」、「知性」、そして「国際性」をキーワードとした新たな教育目標を掲げました。つまり、私どもが、ここに臨んでいる卒業生、そして在校生に期待していることは、「桃李」の精神の下に、高い「志」と「叡知」の追求、そしてこのことを基に「実行」する人たちであることに他なりません。





諸君は今後、それぞれが選んだ道を歩むことになります。いずれの歩みも、自分で決めた重要な道であり、長く遠い道程となることでしょう。

ここで、高度経済成長期の日本を代表し「経営の神様」と称されたパナソニックの創業者、松下幸之助氏の「道」を紹介します。

自分には自分に与えられた道がある。天与の尊い道がある。どんな道かは知らないが、ほかの人には歩めない。自分だけしか歩めない、二度と歩めぬかけがえのないこの道。広い時もある。せまい時もある。のぼりもあればくだりもある。坦々とした時もあれば、かきわけかきわけ汗する時もある。

この道が果たしてよいのか悪いのか、思案にあまる時もある。なぐさめを求めたくなる時もある。しかし、所詮はこの道しかないのではないか。

あきらめろと言うのではない。いま立っているこの道、いま歩んでいるこの道、ともかくもこの道を休まず歩むことである。自分だけしか歩めない大事な道ではないか。自分だけに与えられているかけがえのないこの道ではないか。

他人の道に心をうばわれ、思案にくれて立ちすくんでいても、道はすこしもひらけない。道をひらくためには、まず歩まねばならぬ。心を定め、懸命に歩まねばならぬ。

それがたとえ遠い道のように思えても、休まず歩む姿からは必ず新たな道がひらけてくる。深い喜びも生まれてくる。

大きな未来に羽ばたく卒業生諸君が、それぞれの道を歩むに当たり、恐れぬ勇者たることを祈り、理事会を代表しての祝辞とさせていただきます。

平成 30 年 3 月 1 日

学校法人福島成蹊学園

理事長 高 橋 幸 七





送 辞

凜とした冷たい空気の中、吾妻の白い山並みが誉れ高い姿を見せるこの佳き日に、夢と希望を抱いて学び舎を巣立たれる三年生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお慶び申し上げます。

今、皆様の脳裏には、この成蹊高校でのさまざまな思い出が去来していることでしょう。多くの出会いから得た一つ一つの体験は、かけがえのない青春の一ページを飾っているに違いありません。そのように常に前を歩いて、成蹊生としての手本を背中であげてくださいました先輩方は、私達のあこがれの存在でした。そして大切なものをたくさん残してくださいました。

桃李祭では、生徒が楽しんで参加できる全校企画を立案したり、趣向を凝らしたクラス展示を披露するなど、リーダーシップを発揮して成功に導いてくれました。行事を盛り上げるためなら努力を惜しまない先輩方のチャレンジ精神と行動力に、私達は大変刺激を受けました。球技大会や競技大会では、気迫あふれるプレーと固い団結力により、私達はいつも圧倒されました。そして、クラス一体となって仲間と共に勝利を喜び合う先輩方の姿は、とてもまぶしいものでした。学業においては、高い目標に向かって粘り強く頑張る姿を、学習合宿や放課後の自習時間などでいつも目にしてきました。部活動においても、練習が辛い時、試合で負けた時には、私達後輩を励まし勇気づけてくださり、あきらめないで最後までやり続けることの意義や、仲間を信じることの大切さを教えてくださいました。このように先輩方からたくさんのことを吸収し良い影響を受けたことで、私達は日々成長し、成蹊生としての自覚と誇りを持つことができました。本当にありがとうございました。

さて、先輩方が旅立つ社会では、宗教や民族、国家間での対立や確執が後を絶たず、私達が住む日本もその混乱の渦中にあります。このような先の見えない時代であっても、この成蹊高校で「桃李の精神」を培った先輩方なら、大事なものを失わず、他者に対する寛容さと異文化を尊重する心で、国際社会で活躍していくと信じています。それでも、壁にぶつかり立ち止まってしまうことがあるかもしれません。そんな時には、ここでの三年間を思い出して自分を奮い立たせてください。友人との楽しい思い出は皆様を元気づけ、勉学や部活動で鍛えた精神力





は前進する勇気となり、成蹊で学んだことがどんな困難にも打ち克つ原動力となるはずです。そして、成蹊高校にはいつでも先輩方を応援している先生方や後輩がいることを忘れないでください。私達在校生は先輩方が築き上げてきた伝統を受け継ぎ、いつまでも皆様が誇れる母校であり続けられるよう精一杯努力していくことを誓います。

最後になりましたが、先輩方のご健康とますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます、送辞といたします。

平成 30 年 3 月 1 日

在校生代表 笹 原 知 矩

【送辞委員】

2 年 3 組 笹原 知矩

2 年 7 組 二階堂友大





答 辞

吾妻山の頂きに漂う雲は白く流れ、春を告げる雪うさぎの姿が日に日に鮮やかになり、山々が青々と輝きはじめた今日の佳き日に、私たちは旅立ちの時を迎えます。先ほどは、校長先生をはじめ、皆様から温かいお祝いと励ましのお言葉を頂戴しましたこと、卒業生一同、心より御礼申し上げます。頂いたお言葉が、学舎を旅立つ私たち1人ひとりの心に響き、これから歩いていく未来への期待に、胸を膨らませています。

3年前、私たちは真新しい制服を着て、履き慣れない革靴を履き、あさひが差してきらきらと輝くこの福島成蹊高等学校に入学しました。それから3年間、一貫コースでは6年間の集大成を為す3年間として、日々クラスメイトと切磋琢磨しながら勉学に励んできました。特進コースでは、懸命に学習に取り組みつつ、常に「受験」を意識し、学習合宿や、登山・強歩などの行事で縦のつながりを強め、同じ目標に向かって努力する仲間がいる大切さを学びました。普通コースでは、学習はもちろん、部活動やボランティア活動にも精一杯取り組みました。部活動では、努力を実らせることの難しさを痛感し、打ちひしがれたこともありましたが、試行錯誤の末に目標を達成したときの喜びは大きく、感動的な思い出となりました。また、ボランティア活動では、幅広い年齢層の方々、海外の方々との交流といった、学内ではできない体験を通して、相手の立場に立って物事を考えることの大切さを学びました。

成蹊高校では、さまざまな行事がありました。色とりどりのクラスTシャツが体育館やグラウンドを鮮やかに染め、炎天下にも負けない熱気で全力勝負をした球技大会。桃李祭では、どのクラスも工夫を凝らし、自分たちにしかできない発想で、最高の思い出を作りました。2年生の時に行われた合唱祭は、日々練習を重ね、素晴らしい歌声を響かせました。競技大会ではクラスそれぞれが優勝を目指し、走り抜きました。

さまざまな行事や活動の中で、最も印象に残っているのが研修旅行です。一貫コースはベトナム・カンボジアへ、特進コースはカナダへ、普通コースは台湾へと、全コースが海外に行き、日本とは違う文化や人柄に触れました。文化も言語も異なる場所で交流し感じるにより、これからグローバル社会の中で生きていく私たちに、国際人としてどう歩むべきかという指針を与えてくれるとともに、福島の生んだ世界的歴史家、朝河貫一博士が述べられている「さまざまな国の人たちを知ることは、自国民をよく知ること」という言葉通り、我々日本を知ることにも繋がりました。

今思い起こせば、私達の高校生活は、いつもは優しく、時には厳しい言葉で道を開いてくださり、最後まで私達の可能性を信じてくださった先生方に支えられていました。おそらく私達は、先生方が私達にしてくださったことの半分も知らないのではないかと思います。ですが、この3年間幾度となく叱られ、その度に先生方の私達を想う気持ちを感じました。就職活動や受験に挑戦するときも、休日にまで相談に乗ってくださり温かく背中を押してくださいました。本当にありがとうございました。





また、多くの友人との出会いもありました。学校に行きたくなかった日でも、休み時間の他愛のない会話を思い出して乗り切れたことが何度もありました。個性豊かで頼もしい友人に囲まれて、毎日が楽しくて仕方ありませんでした。私の高校生活をこんなにも笑顔いっぱいの楽しい思い出にしてくれて感謝しています。しかし、当たり前のように会えるのは今日が最後です。これからは「約束」をしなければ会えません。明日からは別々の場所で、一步步それぞれの目標に向かって進んでいきましょう。みんなに出会えて本当に良かったです。

そして、18年間私たちのそばでいつも一番の応援団でいてくれた家族。心配をかけたり困らせてしまったり、時には反抗してしまった時もありました。しかし、朝早くからのお弁当作りや部活の応援、学校への送迎など、どんな時にも支え、信じてくれたおかげで、私たちは今日という日を迎えることができました。今、私たちの姿はどう映っていますか？これからは、今までもらった愛情にこたえられるように一生懸命頑張ります。今日まで育ててくれてありがとうございました。これからも私たちのことを見守っててください。

今日で私たちは高校生活の全てを終えます。在校生のみなさん。高校生活は有限です。この3年間、思えばあっという間に過ぎてしまったと感じます。この限られた時間をただ茫然と過ごすのではなく、沢山悩んで、沢山楽しんで、高校生活を謳歌してください。その中で自分が一体何をしたいのか、目標が定まってくるのだと思います。そして皆さんなら私達以上に成蹊高校を盛り上げてくれると信じています。辛く厳しい時も、最後まであきらめないでください。必ず道標は見つかるはずです。遠く離れても、私達卒業生は皆さんのことを応援しています。

明日から私たちはそれぞれの道を歩み始めます。これから先、楽しいことばかりではなく辛いこともあるでしょう。社会情勢は必ずしも穏やかなものではありません。しかし、私たちは成蹊高校で学んだことを自信と誇りに、愚直に努力することを忘れず、目標に向かって歩み続けることができるはずです。そう信じています。

最後になりましたが、本日の卒業式にご臨席を賜りました皆様に感謝するとともに、福島成蹊高等学校の益々のご発展を卒業生一同心より祈念し、答辞と致します。

平成30年3月1日

卒業生代表 権 藤 あさひ

【答辞委員】

3年1組 三浦 愛果

3年2組 齋藤 柚希

3年4組 権藤あさひ





祝 辞

本日ここに、晴れて卒業式を迎えられた皆さん、御卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

また、今日の晴れの日まで、子どもたちに限りない愛情を注ぎ育てこられた御家族の皆さん、建学の精神に基づき情熱をもって教え導いてこられた教職員の皆さん、さらには温かい御支援と御協力を賜りました地域の方々に対しまして、深く敬意と感謝の意を表します。

東日本大震災から間もなく7年が経過しようとしております。

新たな交通ネットワークや福島の未来を拓く拠点施設の整備・進展を始め、古里への帰還に向けた動き、観光地におけるにぎわいの回復、県産品の輸出拡大など、福島県の復興は新たなステージを迎えております。このような中、勉強や部活動などに全力で取り組んでこられた皆さんのひたむきな姿や、文化・スポーツでの目覚ましい活躍に県民は大いに勇気づけられてきました。

高等学校卒業という人生における大きな節目を迎え、皆さんの胸中には在学中の様々な思いが去来していることと思います。幅広い教養や技能、創造力などを培ったこれまでの学校生活は、これから新たな道を歩き始める皆さんにとってかけがえのない財産となることでしょう。本校で学んだという誇りを胸に、どんな逆境にあっても決して屈しない強い意志をもち、自らの夢の実現に向けて更なる挑戦を続けてください。

福島県は前例のない様々な課題を抱えており、これを解決していくためには、前例のない取組に挑戦していくことが重要です。美しく魅力あふれる福島県に再び輝く光を取り戻し、世界に誇れる復興を成し遂げていくためには、未来を担う皆さんの力が是非とも必要です。復興の主役は皆さん一人一人です。美しく豊かで希望と笑顔に満ちあふれた「新生ふくしま」を共に創り上げてまいりましょう。

結びに、皆さんの前途に幸多からんことをお祈りし、新しい旅立ちに当たってのお祝いの言葉といたします。

平成 30 年 3 月 1 日

福島県知事 内 堀 雅 雄





祝 辞

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

本日、めでたく卒業証書を手にされた皆さんは、それぞれに将来への夢を抱き、喜びと充実感で胸がいっぱいのことと思います。

また、皆さんの健やかな成長をあたたく見守り、今日の日を心待ちにしてこられたご家族の方々、そしてこれまで熱心にご指導くださいました校長先生はじめ諸先生方の喜びはいかばかりかと拝察し、心よりお祝いを申し上げます。

皆さんは、入学からこれまで、この学び舎で勉学や文化・スポーツ活動、そして奉仕活動などに打ち込んでこられたことと思います。高校生活の中で心に刻まれたたくさんの思い出と、喜びや悲しみを分かち合った多くの仲間との友情は、一生の財産になることでしょう。

いよいよ明日からは、進学や就職など、皆さんそれぞれが志す道や新たなステージへの第一歩を踏み出すことになります。そして、その道の途中で様々な困難や試練にぶつかることもあるでしょう。しかし、どんな時も自分の夢や目標を見失わず、強い意志を持って着実に一步一步進んでいただきたいと願っております。

さて、東日本大震災と原発事故から間もなく7年が経過しようとしていますが、本県産農産物に対する根強い風評が残るなど、復興は「道半ば」という状況です。

このような中、福島市においては、今年4月からの「中核市」への移行、そして東北中央自動車 福島～米沢間、福島～相馬間の相次ぐ開通、さらには2020年の東京オリンピックにおける野球・ソフトボール競技の開催など、本市が大きく飛躍する舞台が整ってきております。

これらチャンスを実実に捉え、「開かれた市政」と「スピードと実行」をモットーに復興をさらに加速させ、今後の福島を担う若い皆様はじめ、市民の皆様方とともに、「元気あふれる福島の新ステージ」を築いてまいります。

卒業生の皆さんには、今日まで皆さんの成長を支えてくださった方々への感謝の気持ちを忘れず、生まれ育ったこの「ふるさと福島」に自信と誇りを持って、力強く歩んで行かれることをご期待申し上げ、お祝いの言葉といたします。

平成30年3月1日

福島市長 木 幡 浩



校歌

わが学び舎の

名もゆかし

桃李の花の

匂へれば

ものいはねども

慕ひくる

かげやこみちと

なりぬべき

金剛石の

みさとしに

阿武隈川の

よとみなく

進みゆく世に

遅れじと

いそしむ技の

楽しさよ

仰げば尊し

一、仰げば尊し わが師の恩

教えの庭にも はやいくとせ

おもえばいととし このとし月

今こそわかれめ いざさらば

二、たがいにもつみし 日ごろの恩

わかるるのちにも やよわするな

身をたて名をあげ やよはげめよ

今こそわかれめ いざさらば

三、朝夕なれにし 学びの窓

ほたるのとし火 つむ白雪

わするるまぞなき ゆくとし月

今こそわかれめ いざさらば

螢の光

一、螢の光 まどの雪

ふみ読む月日 かさねつつ

いつしか歳も すぎのとなを

明けてぞけさは 別れゆく

二、とまるもゆくも かぎりとして

かたみにおもう ちよろずの

心のはしを ひとことに

さきくとばかり うとうなり